
バカとテストと有名人

和音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと有名人

【Nコード】

N48730

【作者名】

和音

【あらすじ】

文月学園に転校してきたのは、世界的に有名な指揮者と呼ばれる父と、一気に勝ち組まで上り詰めた、ファッションの会社を立ち上げた母を持つ、「超音感」と呼ばれる九条 和音。

彼には、色々な問題を抱えて文月学園に転入してきた？

く自分とバカと音感とく

ここは、都立文月学園。日本で初とされる、「召喚獣」システムが採用されている所だ。

ここにはA〜Fまでのクラスがあり、頭の良い順でクラス別されている。

そして、教室の雰囲気も扱いもクラスによって変わる。

僕はここで「特別特待生」として、文月学園の生徒になる。

僕の名前は九条くじょう 和音わおん。

僕の学校では、スクールステイと呼ばれる制度ある。スクールステイというのは、別の学校で色々な体験をして、交流を深めようという事だ。属にいう、ホームステイの学校版という事だ。

「今日からここでお世話になるんだ！頑張らないと！！」
僕は文月学園の中に入った。

「えーと、校長室はつと…」
うむ。わからない。これだけ広いとどこになにがあるかわからない。学園案内図を落としてしまった。僕がキョロキョロしていると…

「あの…すみません。転入生ですか？」
話しかけてきた。振り向いてみると

すごい美人な子が目の前にいる。髪は茶色で目が大きい。頭も良さそうだ。

「え？ああ…そうですね…校長室を探しているんですが？」

「校長室ですか？こちらです。」

彼女はニコツと笑った。こんな美人な子が世の中にいるんだ…。どこかの誰とは大違い。

彼女に着いて行く途中。ある二人組とすれ違った。

「明久。今度はお前がアキちゃんで乗り込め。」赤い髪の男が言った。

「嫌だよ！！なんで僕がしなきゃ！この鼻くそ野郎！」

バカそうな男が答えた。「なんだと！くたばれやがれ！糞野郎！」

「上等だよ。雄二。体育館裏来い。」

どうやら赤い髪の男は雄二というらしい。

「ふんつ。今日こそ返り討ちにしてやる。」

という罵倒を言いながらこちらに向かつて来た。

そして、バカそうな男：明久ってさっき言ってたっけ？

彼が案内をしている彼女に話しかけてきた。

「あれ？木下さん？珍しいね。」

「あら。吉井君。なに？また悪い事考えてるの？」

「ち…違つよ！あの鼻くそ野郎をボコボコにしてくるだけだよ！つてあれ？その後ろにいる人は？」

僕の方に目を向けた。

「彼は、ここの転入生よ。今、校長室を案内している所よ。」

「へえ〜！転入生！初めまして。僕は吉井明久よしいあきひさつて言うんだ。よろしくね！」笑顔で話しかけてきた。「よ…よろしく。」

「君はクラスはどこなの？」

クラス？ああ。頭の良い順だっけ？

「実はまだ、わからないんだ〜。多分、校長室でわかると思う。」

「そっか。同じクラスだったらいいね。」

遠くから雄二という男が話しかけてきた。

「おーい。女装野郎！早く来いよ！」

「くっ！あの筋肉野郎。僕、もう行かなきゃ。あ、僕はFクラスだからね〜！」そう言いながら、彼は走って行ってしまった。

Fクラス。さつきも言ったように、この学園は頭が良い順でクラス分けされる。Aクラスが一番頭がいい生徒達が集まっているクラス。そう。つまり、Fクラスが一番頭が悪い。「バカ」のクラス。なりたくないわけじゃないが、なるだけ、「普通」に暮らしたい。そう、誰にも気づかれずに。

なんてことを思っていると、扉の前に来た。

「ここが、校長室よ。」

どうやら着いたらしい。「ありがとうございます。」

「いえ。こちらこそ。私は木下優子きのしたゆうこ。あなたは？」

「僕は、九条和音です。」「九条君。ね。わかったわ。よろしくね。」

彼女…木下さんと呼んでおこう。木下さんは握手を求めて来た。

こんな美人な子から握手を求められるなんて光栄だ。こちらこそ。

握手をして、木下さんは行ってしまった。

さて、説明を受けにいこう。

僕は、校長室の扉を開けた……

作者談義 1 (前書き)

次は作者の戯言です！

お付き合いください！

作者談義 1

完全オリジナルです。

できれば、見て欲しいです。

よろしくおねがいします！ども〜！
作者です

初めまして〜！

初めてのバカテス二次創作。

文章力がない自分ですが、よろしくおねがいします！

実はこの和音君。僕が考えている小説の主人公の仲間という設定です！

また、和音君の高校は、文月学園の仲の悪い姉妹校っていう設定なんです！

要望があったら、落ち着いたら書こうかなと思います〜！

今回の談義はこの辺で！
では

和音君が文月学園に来た理由とは！？

そして、和音君の召喚獣は！？

これからも、和音君共々よろしくおねがいます！

カヲルと宗一と和音。

果たして木下さんと別れ、僕は校長室の扉の前にいた。

ふう…緊張するな。当たり前前だけど。

トントン…僕は扉を叩いた。

「おや？来たかい？」

扉の向こうの人は言った。

「今日から、文月学園に転入して来ました！九条和音です。」

「おつ。来たねえ。お入り。」

「失礼します。」

扉を開けた。そこには、イスに座っている女性とその脇にいたのは筋肉がムキムキの男性。

「待っていたよ。九条。」女性が答えた。

「ご無沙汰します。カヲルさん。」

「そちらさんの校長は元気かい？」

ああ。雷じじいの事か。「元気なんじゃないんですかねえ…？今はあなたに勝つ方法を探してると思っていますよ。」

「そうかいそうかい。元気な事だねえ。」

僕の学校の校長と文月学園の学園長は昔からの知り合いらしい。最も、仲が良いってわけじゃなく、仲が悪い。詳しい事はわからないけど、聞いた話によると、文月学園と僕の学校は姉妹校で、常になんでも勝とうとしてるらしい。

「まさか、九条が来るとはねえ。」

「いや…確かにそうですね。自分でも驚いていますよ。」

この方が文月学園の学園長の藤堂カヲル（とうとうかをる）さん。この方が「召喚獣」システムを開発した本人。

そして雷じじいの言う話ではかなりいやらしい。

この人には頭が上がりなくらいに助けてもらってる。

そして、この人。

「これ、母から宗一さんへのお土産です。」

僕は手から下げていたお土産を宗一さんへ渡す。「お！ともちゃんからか！」

「お久しぶりです。宗一さん。」

「我が学園へよく来たな！和音！」

彼は西村宗一さん。

僕の母の兄の弟。つまり、親戚。僕が小さい時よく宗一さんのすんでいた家へお邪魔して遊んでいた。最も僕が中学の頃から会わなくなっただけ。まさか、文月学園にいるとは…世の中は狭いなあ…。

「裕隆さんは元気か？」

「さあ？何もわかりません。大方、外国ばっかでこっちに帰って来る事なんてないんじゃないですかね。」

僕はふくれつつらで答えた。

「さて、意図端会議はここまでだ。」

カヲルさんが言った。

「ここからが本題だよ。ここの学園の制度やルールは大体わかっているから、説明は省く。本題はクラス分けだ。」

来た。クラス分け。僕が一番気にしていた事だ。あまり、目立ちたくないクラスで。

「職員会議で色々意見があっただがねえ。だが、学園のルールはルールだ。特待生でも扱いは同じ。九条は試験を受けてないからねえ。今の所全教科0点。」

つまり…？

「つまり、九条和音を本日から文月学園Fクラスの生徒して、認め
るー！」

え…。Fって事は、つまり……。バカ。

そういうことである。

いくらなんでもひどい！！そりゃ試験受けてないけどさ！！カヲル
さん。そこをなんとか。

「ルールはルール。」

ルールだからしょうがない！…いやいや！嫌だよ！僕は、さっきの
二人組の片割れ…バカそうな男…吉井明久の言っていた言葉を思い
出した。

…吉井明久と同じクラス。

あの赤い髪の人はこのクラスなんだろうか？

頭良さそうんだけどなあ。

「特に注意してほしいのは…Fクラス代表、坂本雄二さかもとゆうじと観察処分者、
吉井明久だ。」

と宗一さん。

雄二？どこかで…？

思い出した。吉井明久の片割れの赤い髪の人だ。確かに僕を見る目
が尋常じゃなかった。まるで、品定めしてる様で…

「あいつらは本学園始まって以来の問題児だ。坂本はな、Fクラス
の主席で頭がものすごく切れるからやつかいだ。そして吉井。あいつ
は本学園切つてのバカだ。だが、時には超人並みな力を発揮する。」

あの二人。そんなに問題児なのか。そんなに悪そうには見えなかつ
た。そんなにかな？

「和音、くれぐれもあいつらには関わらない方がいいぞ！」

そんなに悪いかな？ただ、単に楽しんでるようにしか…

「では、西村先生。九条をFクラスへ。」

「わかりました。和音こっちだ。」

僕は宗一さんに着いていった。

いよいよ、Fクラスだ。どんな生活が待ってるんだろうか。

僕は、宗一さんの合図で教室へ入った。
…

バカとテストと有名。(前書き)

第3回の「カヲルと宗一と和音。」の回の訂正と間違いを発見致しましたので、書かせていただきます。

バカとテストと有名人。

どうも。作者です。。

「カヲルと宗一と和音。」のタイトルの回ですが、3箇所、間違い
& a m p ; 訂正がありましたので、お知らせします。

その1

鉄人の親戚関係が、わかりにくいので、訂正させていただきます。
母の兄の弟という設定でしたが、母の兄という設定にさせていただきました。
きました。誠に申し訳ございませんでした。

その2

意図端会議と書いてましたが、漢字を間違えてしまいました。
意図端 井戸端です。
すみません。

その3

文章の初めに「果たして」と書いてありましたが、「かくして」で

す。申し訳ございませんでした。

数々間違えてしまい、大変申し訳ございませんでした。

では、次回からの本編をお楽しみください。

く和音とFクラスと写真とく（前書き）

いよいよ。

Fクラスメンバーとの絡みです！

く和音とFクラスと写真とく

「今日は、1週間前から言っていた転入生が来る。」

宗一さんが教室の中でそう説明している。

「前にも言ったと思うが、文月学園の姉妹校からの代表として来ている。短い期間だからと言って、差別しないように。Fクラスの仲間だ。」

緊張してきた……。一体どんな人達がいるんだろうか？校長室での宗一さんの言葉がよぎった。

「特にあの二人組は要注意だ。」

そう。吉井明久と坂本雄二。宗一さんが言うにはかなりやっかいと言っていた。本当にそうなのだろうか？

「では、入ってもらおう。転入生。入りなさい。」

ふう。僕は入る前にため息をした。気合いを入れる為に。さすが、宗一さん。プライベートと仕事とちゃんと分けてる。よし。行くか！

ガラガラ……

シーン。皆、僕に集中している。ちゃんと、自己紹介しないと。僕は教卓の前に行き、皆を見た。

あ。一番後ろには偉そうに座っている鋭い目でこちらを見ている赤い髪の男……坂本雄二だ。

そして、ヘラヘラとした顔で見ているバカそうな男……吉井明久。

「では、自己紹介を頼む。」

宗一さんが言った。

僕は落ち着かせ、答えた。

「今日から、ここ文月学園のFクラスにお世話になります。九条和音と言います。色々ご迷惑をかけると思いますが、何卒、宜しく願います。」

そういうと、宗一さんは、黒板に僕の名前を書いた。

皆がざわざわしている。その中に似つかわしくない可憐な美少女が一人。

ピンクの長い髪の女の子だ。こちらを笑顔で見ている。

文月学園には、美少女がたくさんいるのだろうか？さっきの木下さんといい、ピンクの髪の子だったり。

ん？よく周りを見ると、制服を間違えて来ている子がいる。あの子、女の子だよな？よく、見ると木下さん？かな？でも、髪が違う。

「以上だ。九条。お前は、そうだな……。」

宗一さんが周りを見渡す。

「西村先生！僕の後ろ空いてるよ？」

そう言ったのは吉井明久。

「お前の後ろは絶対駄目だ！！！」

「なんでですか！？」

「バカがうつる。」

「しどいよ！それが教師の言う言葉！？」

「事実を言ったただけだ。」「ひどいよ…。鉄人。」

「吉井。あとで補修だ。」「うそだあああああ！」吉井明久は倒れてしまった。

「では、木下の後ろの席だ。」

木下？誰だろう？やはり、あの木下さん？

「九条！ここじゃ！ここ！」

声のした方に顔を向ける。

やはり、木下さんだ。木下さんもこの教室だろうか？

僕は木下さんの後ろの席へ着いた。

「では、休み時間にする。次の時間は、遠足についての説明や、班分けをする。」

宗一さんはそういって、出て行ってしまった。

その途端。

「おらあああ！須川ああ！前の時間のUNOの恨み晴らす！覚悟しやがれえええええ！」

という罵声を発端に騒ぎ始めた。

「同じクラスになったね。九条君。」

振り向くとそこには、吉井明久がいた。

「あ。そうだね。ははは……」

「これから改めてよろし痛い！痛い！ちょっと雄二、邪魔しないでよ！……」

横から坂本雄二が割り込んできた。

「このバカがなんか言ったと思うが気にしないでくれ。」

「あ。うん……」

「俺の名前は坂本雄二だ。一応、Fクラスの主席だ。よろしく。」

握手を求めてきた。初めての坂本雄二。改めて坂本君。と会話。

見た目は怖そうだなとは思ったけど、すごく優しい感じた。

「うん。よろしく。坂本。僕は九条。」

握手をした。笑顔を向けている。なんだいい人そg a j i ????

??? j g a w p o a f w . 7 ? ! ! ! ! !

「……土屋康太……よろしく。」彼はグツと親指を上げた。

「……この！写真どうしたの！？」

「……新しい仲間の歓迎の証。」

いやいや！これは駄目だよ！恥ずかしいよ！みてられないよ！

「こ、これ、返すよ。僕には刺激が強いみたい。」

僕は土屋君に返した。

「なんの写真あげたのさ！ムッツリーニ？」

「……これ。ただのミニスカの姫路の写真。」

彼は何者なんだ。一体。「あいつは、皆からはムッツリーニ（寡黙なる性識者）と呼ばれてる。悪気はないんだ。許してやってくれ。」

ムッツリーニ（寡黙なる性識者）？どついう意味なんだろうつか？

「後々、わかるさ。嫌でもな。」

「……うん。」

戸惑っていると、前の席から話しかけてきた。

「わしの名前は木下秀吉きのしたひでよしじゃ。これからよろしくのう。」

変わった口調の子だ。なんか、戦国の人みたいだ。

「木下さん。だよね？さつきはありがとう。」

「さつき？はて、わしはお主と今さつき合ったばかりじゃが？」

木下（？）さんは戸惑っている。どういうこと？

「あ。九条君。」

と吉井君。

「さつき校長室まで案内したのは、秀吉の双子の木下優子さん。つてことは…？」

こちらは木下さんの弟！？すごい可愛い。つて男！？

こんな可愛い男の子がいるなんて！

「よ…よろしくね。秀吉君。」

秀吉君が赤く顔を染めている。…すごく可愛い。「お主はわしを男と思っているのかの！？」

「だって、男の制服来てるでしょ？」

「さすがじゃ！九条！」

「ムツツリーニ。なんだろうこの敗北感。」

「…意外な強敵。」

「悔しいよ！ムツツリーニ！」

「…がんばれ…。」

秀吉君はまだ感激している。そんなに嬉しいのかな？

「わし。ちよつと、外に出てくる。」

「待って！秀吉！僕も行くよ！」

二人は出て行ってしまった。

土屋君もいつの間にかいないし。坂本君も自分の机で寝ている。

「あ…。あの。」

「はい？」

目の前には、あのピンクの髪の子とその後ろには赤い髪の女の子が立っていた。

「私は、姫路瑞希ひめじみずきって言います！」「姫路さんだね。よろしく。」

「私は島田美波しまたみなみよ。」

「よろしく。島田さん。」「九条君は、」

チャイムがなってしまった。

「あ。気にしないで下さいっ！」

「えっ。あっそう？」

宗一さんがチャイムが鳴り終わったと同時に入ってきた。

ここがFクラス。

個性的すぎてなかなか大変そうだけど、楽しみだ。

・そう思いつつ、説明を受ける。

和音と遠足と班分けと。

「この時間は明後日行われる、遠足の班分けと説明をする。」
と宗一さん。

遠足かあ…懐かしいなあ…。小学校の時からだ。僕の学校は……一応進学校だ。時期的あまり知られてないけど。「文月学園」と時期が重なり、皆が文月学園の方へ興味関心が行き、僕の学校はあまり目立たなかった。まあ、そのおかげで、僕も入れたし。

しかし、進学校の文月学園に遠足があるなんてなあ…進学校だからないと思ってたのになあ。

「まず、班分けをする。班分けの方法だが…」

「はいはい！」

吉井君が勢いよく手を上げた。

「どうした、吉井。ついに頭がお花畑になったか。須川！吉井を良い頭の病院に連れてってやれ！！」

「そうそう。僕も病院探してたんだよね。って違う！！」

……。

え？なに。この空気。すごい冷ややかな目は。

「おい。あの吉井が遂にノリツツコミしたぞ。」 「だな。日本のいや、世界の崩壊だな。」

「しかし、つまらないノリツツコミだったな。」 「ツマンネ。」

「秀吉、好きだ！！！」

こそこそ声が聞こえた。うわあ…酷い言われようだ。しかも、全然関係ないこと言ってる人がいるし。

「班分けについてですよ！！」

「ほう。言ってみる。」

「ただ、班分けするのはつまらないと思います。だから、」「だからっ。」

「Fクラス限定試験召喚戦争をして勝った上位5名が好きなメンバーを選ぶ！っていうのはどうですか？」
周りがざわつき始めた。試験召喚戦争。略して試召戦争。ここ文月学園の最大にして最高のシステムだ。この試召戦争によって、唯一、Fクラスや他のクラスがAクラスや上位クラスの教室や設備を交換することのできるシステム。

「前にも言ったように、文月学園では、クラスが上なら上な分だけ、設備や教室が豪華になるのだ。例えばAクラスならエアコンはもちろん、かく机にパソコンが備え付け、お菓子やジュース、冷蔵庫が設備されている、超高級な設備。一方Fクラスは、机は卓袱台。椅子は座布団。そして、床は腐りきってる畳。こんなかんじにAとFではかなりの差がある。しかし試召戦争を行う事で、勝ったクラスが負けたクラスの設備や教室を交換できる。――
そんな試召戦争をFクラス限定でするの？考えてもみなかったな。」

宗一さんがかなり困った顔で吉井君に質問した。「それで、吉井。それはどういう事だ？説明をしてくれ。」

その時だった。

「その説明については俺がしよう。」

後ろの赤い髪・坂本君が言い放った。

「雄二。あとは説明頼むよ。」

「おう。明久。」

二人は教卓を入れ違いになった。そして坂本君が優しくしてしかし何か闘争心に燃えているような声で

「皆！西村先生。試召戦争はわかるな？」

「ああ？」

「つまり、それをそのままFクラスだけでしようってことだ。」

「しかし、設備や教室なんてないから交換はなし。そのかわり、上位5名の一番から順に好きな奴を班に入れる。その上位5名が各班の班長だ。」

「え？ちよつと待つのじゃ！」と秀吉君。

「なんだ？秀吉。」

「それはわかるのじゃがな。雄二。戦争は教室内でするのかの？あまりにも狭すぎると思ふのじゃが…」

秀吉君の質問も最もだ。確かに教室内だといくらなんでも狭すぎる。

「…たしかに。」

「土屋君もそう思うよね？」

「…うん。」

「秀吉。よく言ってくれた。そこも考えてある。まず、スタート地点を3箇所用意する。」

「3箇所…ですか？」

「そうだ。まず、1箇所目は体育館。2箇所目は1階から2階になく階段。3箇所目は2階から3階になく階段からスタート。ゴールはここFクラス。それぞれ、1箇所目はA地点。2箇所目はB地点。3箇所目をC地点とする。」

「まず、A地点の連中がスタートを開始する。それから、5分後にB地点。さらに5分後には、C地点。C地点の連中は開始10分後にスタートだ。」

「え？でもさ。」

僕が質問をした。

「それなら、C地点の人達が圧勝しちゃうんじゃ？」

「いや、ただではゴールさせん。各階事に、教科の先生達を配置。」

その先生達を倒さないと前には進めない。これなら、勝ち目はあるだろ？」

「先生達い！？」

皆が声を張り上げた。

「坂本！馬鹿言うんじゃねえよ！」

「そうだよ！雄二！勝てるわけないじゃん！」

「まあ。落ち着け。そりゃ確かに俺達だけでは勝てない。しかしだ。先生達には一問だけ、難しい問題を出してもらおう。その問題に正解

すると前に進める。仲間と協力してもよし。仲間を蹴落とすのもありだ。」

「うおおおお！やろうぜ！」

「やってやるぜ！」

坂本君は、やっぱり只者じゃない。ただのバカじゃない。頭がすごい冴えてる。なんていうか。――策士みたいだ。

「雄二。すごいでしょ？」驚いていると、吉井君が話しかけてきた。「う、うん。坂本君は何者なの？」

「雄二はね、神童と呼ばれた男だよ。元だけどね。」

「神童？」

「うん。子どもの時、天才で神童とも呼ばれてたんだ。でも、何故かわからないけど、今じゃFグラスにいるんだよね。」

天才……か。そっぴや、僕も天才って呼ばれてたなあ。将来は親父と同じ天才指揮者になるって言われたなあ。末はベートベンかショパンか。なーんて言われた事もあった。

でも、僕はそんな世の中が嫌だった。勝手に僕の将来を決められて。僕だって最初はノリ気だったさ。でも、親父になんてなれないし、なりたくもない。

「お前は九条家の恥だ。日本にでもどこにでも行け。お金は工面してやる。だが、金輪際、この道には入るな。」

「九条君。大丈夫？」

吉井君の声が耳に入る。「え！？あ、ごめん。」今はこんな事考えてる場合じゃなかったな。

「でもさ、坂本。」

「なんだ？島田？」

「その地点はどうやって決めるのよ？」

「それは、このくじ引きだ。」

まあ。くじ引きの方が不正行為もないし、いいんじゃないかな？

「どうですか？西村先生。」

「そうだなあ。…お前たちがやる気になるなんて試召戦争以外でやる気になるなんて、珍しいしな！！よし、特例を認める。ただし、先生方も授業がある。授業がない先生達に協力してもらおう！」

くじ引きの結果が出た。九条 和音 - - A地点

吉井 明久 - - B地点

坂本 雄二 - - C地点

姫路 瑞希 - - A地点

島田 美波 - - B地点

木下 秀吉 - - A地点

土屋 康太 - - C地点

須川 亮 - - C地点

「九条。ちよつといいか？」

坂本君が話しかけてきた。

「なに？坂本君。」

「ちよつと話がある。始まる10分前でいい。屋上に来てくれ。明
久も一緒だ。」

それから10分。

ごめん。宗一さん。雄二君と明久君と気が合いそうだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4873o/>

バカとテストと有名人

2011年10月7日22時21分発行